２０１８年度　神奈川県身体障害者施設協会　研究研修委員会

第１回　神奈川県身体障害者施設協会　研究研修委員会

日　時：2018年６月６日（水）14：00～16：00

会　場：リエゾン笠間

出席者：リエゾン笠間　小林浩一（委員長）　鹿嶌亜矢（司会）

足柄療護園　藤田博之　　さがみ緑風園　岡澤亮太　　茜洋舎　黒崎健太郎

水平線　金澤祐貴　　貴峯荘　瀬戸康太　　田浦ﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽｾﾝﾀｰ　猪瀬宏美

れいんぼう川崎　植松志乃　　アガペ壱番館　山口礼子（記録）

＊2018年度は研究を１テーマ、研修を１テーマ行うこととする。

議題１　今年度の研究について検討

研究テーマ案が委員より出された。

①「利用者との会話時間、時間の捻出方法」

②「人権擁護について各事業所の取り組み、実態の研究」

③「地域移行、親なき後の取り組みの実態」

①を取り上げることとする。

各事業所を利用されている方々は、日常の何気ない会話を求めているのではないか。

日々業務に追われる中で、利用者が求める会話ができているか、またその会話の時間をどう創りだしているか調査する。

発語のない方こそ時間を取ってコミュニケーションを大切にするべきではないか？

発語のある方、頻繁に話しかけてくる方の言葉をおざなりにしていないか、等々検討された。

【決定事項】

「利用者さんとの会話時間と時間の創り方」をテーマにアンケート調査、個別記録の実施。

７月の任意の１週間において調査する。

アンケート調査方法・・・

各事業所職員5～10名に利用者との会話時間、時間の捻出方法を回答いただく。

個別記録方法・・・

当委員会の委員が行い、会話時間の他、差し支えない範囲での内容、利用者の状況等記録する。

アンケート、個別記録ともに８月の委員会までに取りまとめ委員会で研究する。研究報告会の開催については、今後検討する。

議題２　今年度の研修（外部講師）についての検討

次回委員会までに、各自希望の研修テーマ、講師の案を出し、委員会で決定する。

第２回　神奈川県身体障害者施設協会　研究研修委員会

日　時:2018年８月６日（月）　14:00～16:00

会　場:リエゾン笠間

出席者:リエゾン笠間　小林浩一（委員長）　鹿嶌亜矢　足柄療護園　藤田博之
さがみ緑風園　岡澤亮太（司会）　茜洋舎　黒崎健太郎　水平線　金澤祐貴
貴峯荘　瀬戸康太　田浦デイサービスセンター　猪瀬宏美　アガペ壱番館　山口礼子
れいんぼう川崎　植松志乃（記録）

議題１　アンケートデータの検討（グループワーク）

グループ①

・アンケート結果より、思っていたよりも利用者と話せていたように感じたが、話をしている時間が排泄介助や食事介助時など、“介助中”に限定されていることが分かった。

・今回のアンケートは利用者側が会話を求めていることを前提として行っているが、利用者が話したい気持ちがあるのに、職員側が忙しそうにしていて話しかけづらかったり、話をしていても時間が限定されてしまっている現状があり、日常的な会話が出来ていないと感じた。⇒このことから、『我々の仕事とは何か？』日々の日常業務をこなすことでも。あるいは支援計画に基づいて動くことでもなく、『利用者の幸せ』のためにする仕事であり、日常業務はその中の１つに過ぎないということ。

・話し合いの中で、入所施設特にユニット型は個室対応が多いため、閉鎖的な空間となり先輩職員がどのように利用者と向き合っているか見ることができない。そのため、後輩にコミュニケーション技術が伝達されていないという意見もでた。

グループ②

・経験年数や施設の種類（入所・通所）、勤務形態によってアンケートの結果が異なっていたが、１日の会話時間を平均すると数十分～1時間という意見が多かった。

・通所施設では利用者の利用時間が決まっていることから、入所施設と比べると自由に会話時間を取ることができないこともある。また、グループホームは入所施設や通所施設よりも利用者と会話できる時間が長いことも確認できた。

・経験年数によっても会話時間に違いがあり、特に中堅職員は業務を回す立場にあるため、利用者との会話時間が短くなっているのではないかとのこと。また男女で比べると意外にも男性の方が会話している時間が多いのではないかとの意見もでた。

・利用者との会話は介助中であったり、自分の業務を終わらせてから時間を作ることが多い。

※続き

・日常業務の優先順位として①緊急性が高いもの②排泄・食事・入浴等の介助③個々の利用者の身の回りの支援④趣味・余暇となってしまており、会話の時間が作れていないと感じた。

・職員同士で価値観（利用者との関わりを重視するのか、業務を回すことを重点に置くのか等）が異なるため、会話の時間が職員によって違ってくるのではないか。

まとめ

アンケートの結果

・利用者との会話の時間が限定されてしまっている

・職員が日常介助や支援計画に追われて、利用者の求める日常的な会話ができていない
ということが分かった。
⇒会話時間が少ないということが分かったが、時間が十分でない・忙しい時に話せないというのは職員側がそうさせてしまっているのではないか？今回は職員側の意見がメインになっているが利用者はどう思っているのか？利用者によっては数十分でも会話すれば満足という方もいれば、寧ろ話しかけられたくないという方もいるのではないか？
⇒今年度の研究内容の『利用者とのつながり』に基づき、次回より利用者側の意見を求めるためにアンケートを作成していく。
＊次回の委員会までに、各自希望の研修のテーマと外部講師を考案し、委員会で決定する。

第３回　神奈川県身体障害者施設協会　研究研修委員会

日　時:11 月 5 日（月）　14:00～
会　場:茜洋舎（見学希望の方は 13:30 に集合）
司　会:田浦デイサービスセンター　猪瀬宏美
記録者:足柄療護園　藤田博之
その他:れいんぼう川崎　植松志乃（産休に入るため）、東海芳治と変更となる
＊12 月に利用者さんからみたコミュニケーションについてのアンケートを実施し、次回の委員会にてとりまとめを行うことを決定。
＊コミュニケーション研修の講師候補として、小野克彦氏が推薦された。

第４回　神奈川県身体障害者施設協会　研究研修委員会

日　時：平成 31 年 1 月 23 日　14：00～
会　場：さがみ緑風園（見学希望の方は 13:30 に集合）
議題１　アンケートについて
1. 職員アンケートをまとめた結果、利用者と職員とでの会話時間が少ないのではないかということから、利用者からみたコミュニケーションはどのように感じられているかのアンケートを委員の施設で実施。その結果報告と考察を行う。

設問１職員と話したいことはありますか
設問２職員と話す時間はありますか
設問３職員と会話するより一人のほうが良いですか
設問４職員には会話より介助を優先して欲しいですか
設問５会話するならどんなことを話したいですか
設問６その他　自由記述

施設Ａより抜粋　　男性３人（40 代. 60 代. 70 代　）
・話したいことはあるが話す時間がほとんどない（もっと話す時間が欲しい）
・会話もしたいが介助を優先して欲しい
・自分のことをもってして欲しい
・施設の決定事項など教えていただくのは、ありがたいが出来れば決定前に相談して欲しい

施設Ｂより抜粋　　男性５人（20代・50代・70代　）
・会話したいことはあるが、会話より介助を優先したいという意見も半数ある。
・一人のほうが良いとの意見もある
施設Ｃより抜粋　　男性５・女性１人（50代・60代・70代　）
・話したいと思っているが、若い職員とは話が合わない
・変化してきている自分を知って欲しい
・話す時間をつくってもらっているが、職員も忙しく走りまわっているので遠慮してしまう
・もう少し話をしたいが、時間が欲しいとは職員さんに言い難い
・介助しながらの会話はあるが、求める会話は集中して話せる時間が欲しい
施設Ｄより抜粋　　男性19・女性９人（30代・40代・50代・60代　）
・生活のことなど、話をしたいことはある
・可能であれば座談会形式で話を行いたい
・私にはかなりの時間があるが、仕事中の職員さんに話をするのは気が引ける
・忙しそうなので、ためらいます
・家族との会話も少ないので色々な人といっぱいしゃべりたい
・介助優先で結構ですが、話しかけてよいタイミング等を教えていただければ
・自分のこと、昔のこと、趣味、給食のことをはじめとして日常会話などを話したい

委員の考察として
・思っていたより、会話をしたいと思っている人が多かった
・利用されている皆さんが、職員に気を遣われているのがわかった
・実は家庭でも会話をする機会が少ない人が多い
・職員と利用者の世代間のギャップが大きく会話に苦労する様子が伺えた
・できれば異性と会話したいとの声もあり、同姓介助における盲点もあるかもしれない
・我々職員には同僚と飲みにいくという違う場面で愚痴を云う場が確保されているが、利用者にその場がないことも伺える
・措置の時代から利用されている人は選択支のない時代を生きてきているため、選択支のある環境を提供しなくてはならないと感じた。

議題２　３月実施の研修について
講師の決定
小野　克彦氏（一般社団法人　花信風（かしんふう）　理事長）　・・・・講師調整：茜洋舎　黒崎健太郎
テーマについては前回の職員アンケートの結果と今回の利用者アンケートの結果を考察するに、職員は介助時を含めて会話をしているという回答が多かったが、利用者からすると介助のときは介助に専念していただいて、別で会話をする時間を確保していただきたいとの要望もあるため、仮のタイトルとして「職員と利用者のコミュニケーションのギャップ（仮）」とし、講師に相談とする。
日時：平成31年３月11日【月】、12日【火】、13日【水】の三日間を候補日とし、時間は午後からとする。→3/12に決定
会場：神奈川県社会福祉会館　第二会議室

役割：会場設営→委員全員　受付：金澤（水平線）　研修案内作成：小林（リエゾン）
アンケート作成：岡澤（さがみ緑風園）　司会：瀬戸（貴峯荘）
記録：藤田（足柄療護園）　研修受付窓口：山口（アガペセンター）

＊第５回は３月 12 日（火）の研修開催前に実施
日　時：平成 31 年３月 12 日　11：00～
会　場：神奈川県社会福祉会館　３階講師控え室
＊当日の司会、記録、受付等の再確認とレジュメ、アンケート、申し込み人数の確認

神奈川県身体障害施設協議会　主催
講演　「利用者との会話」と「対話」を考える
講師　一般社団法人花信風　理事長　小野　克彦氏
1　今年度のアンケート「利用者さんとの会話の時間と創りかた」について
職員アンケートより
・アンケートをすることにより改めて考えるきっかけになった。　脚下照顧
・職員自信の自己開示をきっかけとした共通・共有事項でより深まる。　共通探し
・介護業務をしながら意識的に対話を心がける。　一挙両得
・発信することが困難な利用者との時間の創りかたは課題である。　思案熟慮
・開かれた質問と閉ざされた質問　質問応答
・会話の時間は基本的に介助中に行うので改めてつくる必要があるのか　基本事項
・話したくなさそうな時は、話し変えないようにする。　臨機応変
2　会話と対話の違いについて
3　ユマニチュードについて
4　会話・対話は傾聴が前提です。
かんたんな「対話」を体験するワークショップ
＊参加申し込み　17 名　参加　15 名
【研修への感想、意見、今後のへの要望等】
・もっと利用者さんとコミュニケーションをとってみようと思った。
・少し時間が短かった。
・講師の話をもっと聞きたかった。
・とてもおもしろかった。
・今日学んだことを今後に活かしたいと思います。楽しく研修を受けることが出来ました。
・会話、対話を通じてコミュニケーションの大事さを感じた。
結果は考え方や個人差があり 100％の回答はない。
・もう少しお話が聞きたかったので第二弾があると嬉しいです。
・今日学んだことを現場で活かしていきたいです。対話を意識していきたいです。
ユマニチュードについて勉強したいと思います。

参加者：15 名（委員含む）　アンケート回答者：12 名

平成 30 年度の研究研修委員会は、昨年度に引き続き委員による研修内容についての話し合いを第 1 回の委員会から議論を始めました。議論を重ねていくなかで、その研修が必要な理由や根拠はどこにあるのかという疑問が生まれ、当事者の声は届いているのか、耳を傾けることができているのかどうかというところからアンケートの実施となりました。また、職員側の声と利用者側の声の比較検討も必要ではないかとの意見に基づいて 2 回のアンケート実施することとなりました。委員の考察としては、質問をする職員による返答の違いや、質問の仕方によって偏った側面もあるだろうという見方を踏まえても障害当事者の声としては、「もっと私をみて！　もっと私を知って！」ということの結論に至りました。

これを踏まえて「利用者との会話」と「対話」を考えるという講義を行っていただいた小野克彦氏には感謝でしかなく、今後も当事者支援の日常のなかにある引っかかりを掘り下げて研究するということは、手間もかかり時間を要する作業ではありますが、「あんしん、安全な環境づくり」には欠かせない作業であると思います。

今年度もよいチームに恵まれ、各事業所より派遣いただきましたことを感謝申しあげます。

研究研修委員会　委員長　小林　浩一

委員構成　アガペ壱番館　山口　礼子　さがみ緑風園　岡澤　亮太
茜洋舎　黒崎健太郎　水平線　金澤　祐貴
貴峯荘　瀬戸　康太　田浦障害者ﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽｾﾝﾀ　猪瀬　宏美足柄療護園
藤田　博之　れいんぼう川崎　東海　芳治
リエゾン笠間　鹿嶌　亜矢

平成 30 年度　神奈川県身体障害施設協会　研究研修委員会　活動収支報告

日付	内容	相手先	収入	支出	残高
平成 30 年 7 月 18 日	身障協施設長会 研究・研修費　預かり金		￥150, 000		￥150, 000
平成 31 年 3 月 12 日	第一回研修企画 「利用者との会話」と 「対話」を考える	一般社団法人　花信風 理事長　小野　克彦氏		¥50, 000	¥100, 000
	第二回研修企画 なし				
平成 31 年 3 月 27 日	研究・研修費　返金 手数料			¥432	¥99, 568
残高					¥99, 568